


非
世
落

時代は明治中期——。
渡世人の界隈で名の知れた、**緋紋蝶のお関**という女侠客がいた。
女だてらに諸国の賭場を流れ歩き、
修行の旅に身を
投じていた。

その旅の途中で
とある組の親分と懇意になり、
暫くの間世話なる。





色白の背に鮮やかな柄の蝶を彫り、由緒正しい剣術を操る女博徒。
糸を引いた様な双眸から覗く眼光は、彼女が渡り歩いて来た世界を
物語っていた。

故に心を許す相手も、その人物が如何に
破格の度量を持っているかも知える。

そんな組長の凶報を知ったのは、
お閨が一家に別れを告げて十日後の事だった。

一宿一飯の恩さえ義理を通すお関が
仇の組をそのままにしておく筈がなく、
身にヒ首ひとつで単身乗り込んだ。

「菟木辰五郎!!
恩人の仇だ…覚悟しな!!」

「お…お前は、緋紋蝶の…
何で…何のマネだ!？」





騒ぎを聞きつけた子分達が組長の広い和室に殺到する。
そして長身の女ひとりを取り囲み片っ端に斬りかかる……が、
相手は名の知れた凄腕の剣術使い。
無頼の喧嘩術が通用する相手ではなかった。

「あんたらに直接恨みは無いが、
近づくんなら容赦しないよツ!!」

しかし、お関自身も袖断は出来ない。
いくら田舎や○ザとは言え、こゝこゝら一帯を
仕切る中々の大所帯。
着る物の乱れを気にして
立ち回る余裕は
無かった。

(うひよ…)

(良い足してやがる。)

(くそお…何とか倒せねえか。)

(あの腰巻の奥を拝んでみてえ…。)



その時、組お抱えの用心棒が孤高の女侠客の前に立ちはだから。
お互いに噂は聞いている様であった。

「緋紋蝶の姐さんかい……。
こんな風に相見えるとはねえ。」

一瞬の隙を突かれたお関は
一連の大立ち回りの中で初めて身構えた。



二つの剣気の匠に近寄れずただ見守る
子分共が囲む中、勝負はこれまた一瞬だった。

片方の獣が放った低音の断末魔が
その取り巻きに危機的状況を実感させる。
お関の望みは真に成就しようとしていた。

「どんな縁だろうと、悪に与した
時点で私の敵でござんす。」

「そこまでだ!! お関!!!」

しかし、ここで剥き身の鉄火肌が
絶望の底に落とされる。
一人の子分の腕の中に捕らえられていたのは、
件の恩人の愛娘だった。

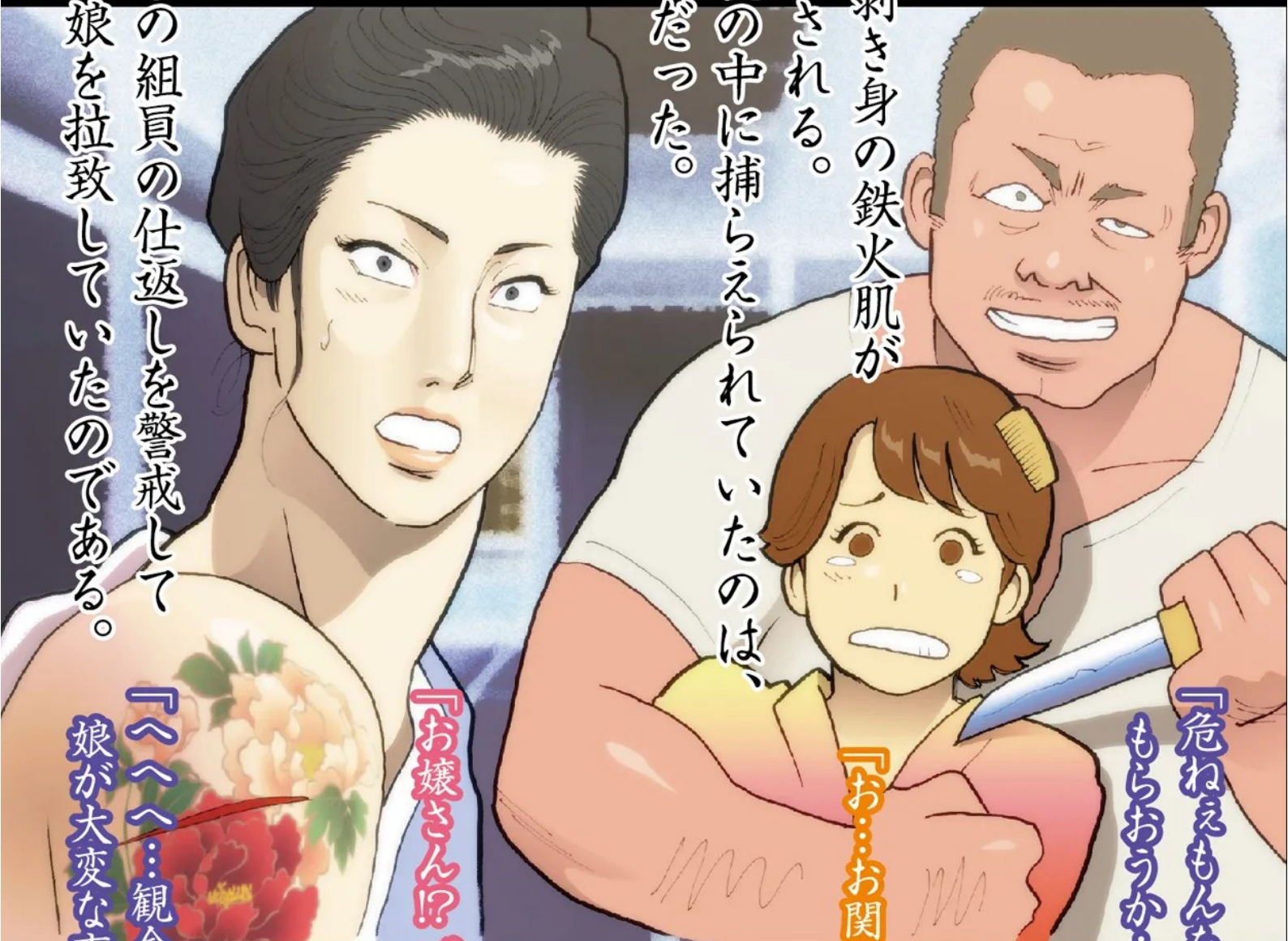
闇討ちした相手の組員の仕返しを警戒して
気質であるその娘を拉致していたのである。

「危ねえもんを引つ込めて
もらおうか……ええ？ お関。」

「お……お関さん……。」

「お嬢さん!? どうして……。」

「へへへ……観念した。さもないと
娘が大変な事になるぜえ。」



卑怯な畏の前に
怨敵の手に落ちてしまった
緋紋蝶のお関。

「くっ……破廉恥な……」

人質を取られてはさすがの女侠客も成す術がない。
ならず者達の言いなりになるしかなかった。
生の蝶の彫り物を拝んだ男達の歓声上がる。

「こいつは……気性のわりに
意外と小振りだな。」

ついには身ぐるみ全て剥がされた状態で
後ろ手に縛られる博徒の女。
影を踏む事すら叶わなかった美人と評判
の侠客の裸体が見れるとあって、斬り合い
に参加してなかった者も集まってきた。

乳房を晒しながらも
凜としたお関の佇まいが、皮肉にも
より一層捕食者らの加虐心を煽る事になる。

「いい格好だな、お関。」

「堪らねえ。はやく
コイツの哭声が
聞きてえよ。」

「私は好きにしている。但し、
お嬢さんは放しておくんなさい。」



「殊勝な事だ。

いいだろう、娘は解放する。

その代わり覚悟しろよ、お関。」

「まずは子分共が仲間の仇を


とりたいらしいから、その支度を

させてもらおうよ。」

お関の股ぐらに脱がされた

「腰の物」が禪の様にして絞められる。

執拗にくい込ます子分の男に苦悶の表情を隠せないお関であった。



両の手を縛られ禪一丁という、渡世人としても
あられもない姿でゴロツキ共の騷りものになるお関。組の
中でも剛の者の巨大な拳が無防備な白い細腰にめり込む。
鈍い音と男達の怒声が牢獄に響く中、口を真一文字につぐ
んで痛みを堪えるお関であった。

「おらあつ!! まだまだ

こんなもんじゃ済まねえぞ!!」

「へへへ……。あの緋紋蝶が

俺の拳骨で悲鳴をあげてるぜえ!!」

「ぐっ……」

数人の輩に囲まれて蹂躪の的になれば、

いかに名の通った女渡世人といえども忍耐

に限界がある。食いしばっていた口から次第

に苦悶の声が聞こえてくるようになっていた。

柳の様に揺れる品やかな女体に流れる汗がゆら

めく蠟燭の火に照らされて光る。


「くはああああつ!!」

あれからどのくらいの間が経ったであろうか……。
報復ともとれる拷問が終わった頃には、倉に差し込む赤い陽光がすっかり消えていた。それぞれが喜悦の表情で見下ろす埃まみれの床には、不当な暴威に晒された女博徒の裸体が転がっていた。

「ごまあ見やがれ。
女が身一つで乗り込んでくるもんじゃないぜ。」

「だが大したタマだ。
結局、哀願の声は
あげなかったな。」

「フン……まだ序の口よ。
おい誰か桶に水くんでこい。
ぶっかけて起こしてやれ。」



休息も束の間、無理矢理彼岸から引き戻されたお関。
玉の様な白い肌には痛々しい痣が残る。

「……………ぐ……………お、お嬢さん……………は。」

「ほお……この後に及んで
恩人の身内の心配かい？
それより手前の身を案じた方がいいぜえ。」

あろう事か、先程まで切った張ったに興じていた
獣共が、今度は色事に食指を伸ばし
はじめたではないか。。。

未だ意識が混濁し、身動きが
とれないお関に、ならず者達の
下卑た色欲が殺到する。

「お、こりやあ渡世人の
姐御にしちや綺麗な
色してらあな。」

「や...やめな。
何すんだい.....」

「今からお関さんには、
女としての喜びをたっぷり
味わってもらおうぜ。」



肉を殴打する音は止み、
男達の罵詈雑言はそのままに
女の嬌声が響くようになった
魔の巣窟。

「噂の女賭博師も
感じるトコロはそこら
辺の女と変わらねえな。」

「くあああああつ…
いやあああつ!!
もうやめとくれえ…!」

「いっつは……」

ホンビキ専門のお関さん
がこんな具合の良い壺を
お持ちとはね。」

「畜生おおおおつ!!!」

お前さんらは…縛られた女に…
こ…こ…こんなマネ…しか
出来ねえのかあああつ!!!」



数日後、囚われの女博徒の
姿はとある旅館の一室に

あった。

すっかり痣も消え真白い肌に戻った

お関だったとその表情は浮かぬ
様子だった。

その訳は彼女と部屋を共にする
年配の男にある。



「親分、大丈夫ですかい？」


先生みたいな上客にいきなり
渡世人の女を相手させて。」

「仕方ねえじゃねえか。」

あの狸の方が緋紋蝶にぞつこん
らしいんだよ。…まったく何処
で聞きつけてきたのやら。」

「まあ心配はいらねえよ。」

お関にも下手な事しやがったら
恩人の命はないと釘はさして
おいた。」



「まさかあの緋紋蝶の姐さんが伽の相手を
してくれるなんてねえ。大丈夫、わしはあんた
の愛好者だからね。イヤな事はちやんと行って
くれたまえよ。」

男の世界を肩で風切って

生きている鉄火肌の

女博徒が、今宵は

口に紅を引き女郎の

様な格好で、またも…

……縛られていた。

「…とんでもございません。」

「この関の体…好きにしておくんない。」

弱みを握られたお関は今宵の一席も黙って従うしかなかったが、やはり色事に不慣れな面が出てしまう。その嫌がる様子がよりこの醜悪な中年の変態性に火を付けた。

「ん〜良い女は吐息も良いにおいがするんだねえ。」

「グッ……」

「まずは手だけでイカせてあげよう。わしの腹の上で存分に悶えるといい。」



「もう……これ以上は……忍耐にも限度が……くああああっ……」

「そんな事言っても体は正直だねえ。汗気を帯びてきてるじゃないか。」

「汚い手をどけなッ！私を誰だと思っただい!!」

組の後ろ盾である代議士に怪我を
させてしまったお関には、一家が
雇った元獄吏による仕置きが待って
いた。

その白い柔肌に食い込む荒縄の
縛法も素人の組員と比べても
厳しいものであった。

「とんでも無い事
したじゃないか。
緋紋蝶のお。」



「ああ……………くうう……………」

「苦しいだろう？」

「早いとこ従順の意を見せないと
もっとキツイ事になるぞ。」

獄吏の男による苛烈な責めは捕われの蝶が二度と空を飛べなくなるまで続く。

わずかに首のみの自由を許されたお関の前には桶一杯の水。

単純な拷問だが、窒息効果と体温低下で受ける側が最も屈服しやすいのがこの水責めである。



「ぶはあああつ!!

…はあつ、はあつ、はあ!

◎△\$♪×¥●●&%#」

「……………」

「かはああああつ!!

はあつ、はあつ……もう……

もうやめ……

◎△\$♪×¥●●&%#」

「……………」

水揚げされた女博徒の口から
ついに陥落の哀哭がもれる。
そして残酷にも、飛べなくな
った蝶に駄目押し
の
乱暴狼藉……。
痛みには屈しない筈の
お閨が尻の穴も露に
泣いて許しを請うて
いた。

「ぎゃっはっは!!
何が渡世人だい、
所詮は女だな!!!」

ここに、緋紋蝶で名の
通った女渡世人お閨は
その博徒人生に幕を
下ろす。

「ぎゃあああつ!!

ご……後生ですからあツ……
あひひひひひひひ!!!」

「ぐはあああつ!!

許して……もう堪忍して
おくんないツ!!!」

荒くれ者達が去った後に、
見るも無惨な刺客の女体が
横たわっていた。
あの白い肌は見る影も無く
埃と痣にまみれ……
にもかかわらず何の手当も無い
まま不衛生な牢に放置された。
その為に彼女は高熱にうなされ、
三日三晩彼岸を
さまよった。

「うう……」

「お……親分さん……」

「ふん……もしくたばったら、
それまでの話だ。骸は、女の
縁の組に送り返しとけ。」

「……関を……」

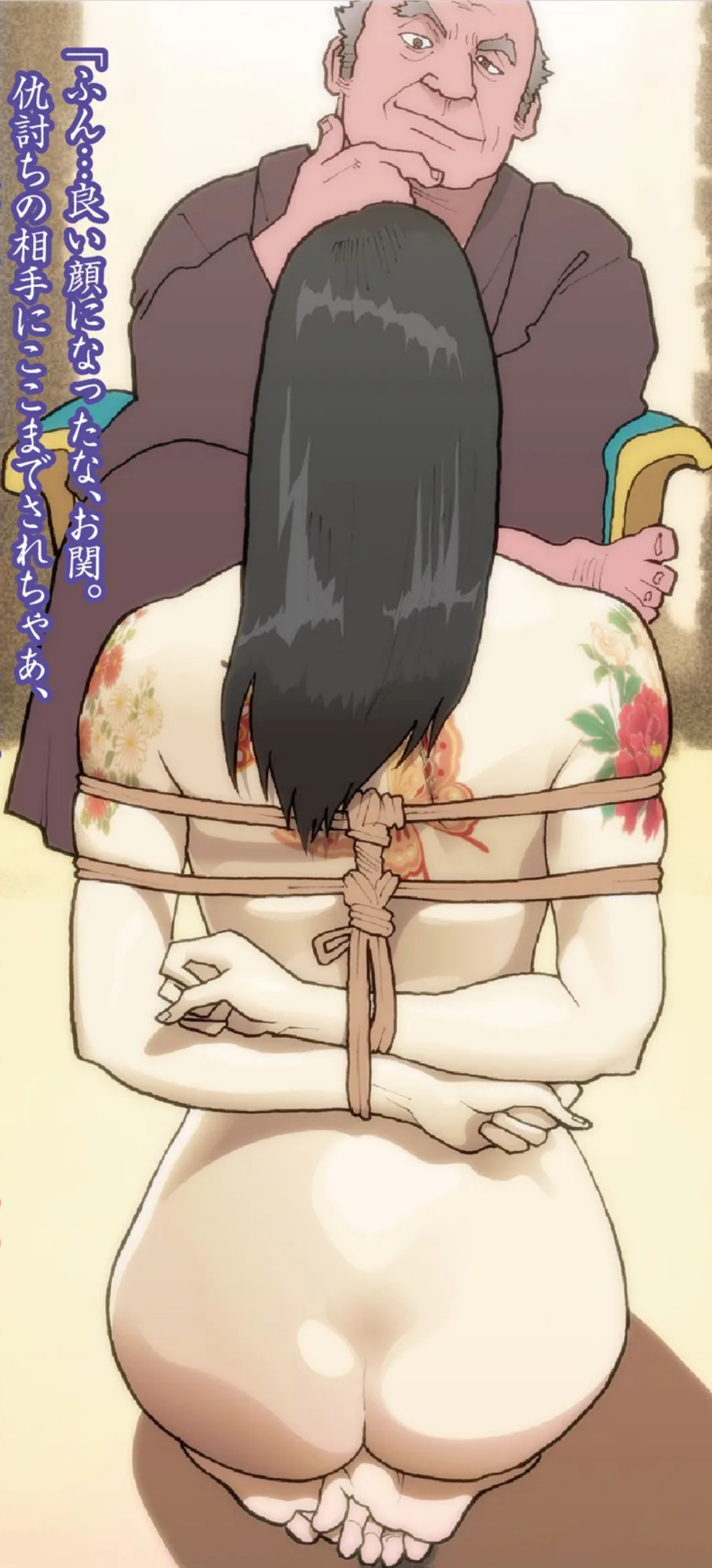
「ゆ……許しておくんなさい……」



かつて自分に牙を向いた女傑の成れの果てを眼下に見据え、藪木辰五郎は至福の時を味わっていた。そしてこの男には今一度、剥き身の刃のようだった女博徒をある目的のため、品定めする必要があるがあった。

「ふん…良い顔になったな、お関。
仇討ちの相手にここまでされちゃあ、
もう渡世人としてはやっていけねえな。」

「…おっしやる通りでございます。
今後の身の振り方を御指南ください。」





「おお……いいぞ。

店の女共には及ばないが、お前がやると趣が違うな。」

すでに弱みであった娘は解放されていたが、渡世人として

の矜持をへし折られたお関

にはもう必要ないものとなっていた。

男のモノをくわえるなど、女としても

初めての事だったが、そこに躊躇いも

抵抗もなかった……。

「ふあああ……かふっ……」

「どうした？」

お前がわしのモノを
こんなにしたんだぞ。

お得意の壺振り
で鎮めてくれよ。」

屈服はしたものの
やはり色事には羞恥
の態を隠せないお関。
普段の凜とした眉根が
こつとも長いこと八の字に
歪んだ顔を見るのは、
辰五郎も初めてであった。

「んあああああつ!!

いいい……きもち……いいい……
はあああああああつ!!!」

「大した女だな、お前は。

仇の腹の上でよくもまあ
そんな顔ができたもんだ。」

「……そんな……無体な……

勘弁しておくんなさい……。
ふあああああああつ!!!」

かつて荒くれ者達を組み伏せてきた
お閨の鍛え上げられたしなやかな肉体
は、全身を并で照らしながら怨敵の上で
上下にゆれていた。
すでに飾りとなった広い背中の蝶も
白い肌が高揚し、緋の紋様が消えいる様
に悲しく舞っている。

果たして孤高の女博
徒と仇である老輩の男
の饗宴は、当の本人達で
さえ忘れるほど夜毎いつまでも続くのである。

「ほれ、何か言う事は
あるか？」

「此度の一件、仁義の
いろはも知らぬ女の
乱心でございます。
今後、組の敷居では
一糸まとわぬ体で
ご奉仕いたしますの
で、どうぞ可愛がって
くださいませ。」



最近、と或る田舎町の藪木組というヤ○ザ一家が取り仕切る賭場場に、都会からきた粋な女壺振り師がいますという噂が流れる様になった。

何でもかかってその界隈では名の通った女博徒らしいが、風の便りには一家の籠の鳥だと真しやかに囁かれた。

「壺かぶります。」

「おい、お関！」

皆さんがこれだけハって来てくれたんだ。場を盛り上げねえか!!」

「いよっ！待ってました!!」



時は明治が終わり、
これから民主主義に向けて
激動の時代を向かえ、
女性の社会進出が
始まる。

そんな時代の裏で
翻弄され生きてきた
一人の女渡世人。
しかし、彼女の行く末を知る者
は誰もいない……。

終

「お関さんですか？ ええ、やっぱり女だてらたああいう世界を渡り歩いていきますからね…
で、あのタツパでしょ。始めは取っ付きにくらでしようね。」

「でも、話すと感じのいいヒトですよ。」

「親分さんの事、随分慕ってましたねえ。」

「まるで本当の父親みたいにな…。」

「だからですかね。」

「お孫さんも彼女に大層

懐いてました。」

「あと、下世話な話ですけど、

息子さんとお関さん…

何か良い雰囲気なんですよ。」

「でもやっぱり相手は

カタギという事で

彼女どつか踏み込め

てない感じですね。」

「そういえば、最近お関さん

見ないですね…。」



御負其之一

「くっ……早いところ済ませな！」

「まあまあ、そう急かささないでおくれよ。
お関さんの素ケツなんてそうそう
見れるもんじゃないからねえ。」

御負其之二



「ふふふ…随分酷くやられたみたいだね。
優しく介抱してあげるわ。」

「や…やめな！
何のつもりだい!!」

「私や、強い女を泣かせるのが好きでねえ…。
特にアンタみたいな、恋のイロハにウブなのが
苛め甲斐があるんさ。」

御負其之三

御負其之四

「へへへ…いい顔だぜ、お関よお。」

「駄目だ。
お前はこの部屋
の中央にある桶
で用を足すんだ。」

「な!? 何だって!!!
馬鹿をお言いでないよツ!!!」

「か…厠はどこだいつ…。」

「ああつ…は…早く
行かせとくれ…。」



「相手が悪かったな、
緋紋蝶。」

「ひ……ひぐう……」

な……翔るなあ……」

殺じてええ……」

「慌てなくてもほつときや死ぬ。
その前に地獄を味わえ。」

それから長い刻をかけて、人の所業とは思えぬ
責め苦を強いられ惨殺された緋紋蝶のお関。
裏の世界にその名を轟かせた女侠客は、
こうしてあっけなくその生涯を閉じた。

若悲劇的結末